

令和5年度 学校経営報告（学校評価報告書）

四條畷市立忍ヶ丘小学校

校長 香村 紀子

1 学校経営方針

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の時期を越え、ようやく様々な制限が緩和される。これまでの学校教育活動から、大切なことをあらためて見いだす機会となった。そこから得た様々なことを、今後学校の営みの中で生かしていくことが求められる。

コロナ禍の学校生活から子どもたちにはマイナスの影響もみられる。中でも「不登校児童の増加」は昨年度の本校でも見られた課題であった。学校の役割は、「子どもたちの健全な育ちを支える」ことであり、そのためには学校が「楽しい」場でなくてはならない。楽しい学校の実現は、子どもたちの学校へ登校する意欲につながるだろう。「わかる楽しさ」「居場所のある安心感」「友だちと関わる楽しさ」「難しいことに挑戦する楽しさ」・・・など学校には子どもたちの「楽しい」が実現できる要素がたくさんある。

今年度、忍ヶ丘小学校は、その「楽しさ」を子どもたちと、教職員と、保護者と、みんなで見だし、創りだし、楽しさを共有したいと考える。具体的には、子どもたちの状況を分析し、「挑戦すること」や「つながること」「学び続けること」の3つに焦点化し取り組みを進める。

「挑戦すること」は、子どもたちがやってみたいことに意欲的に挑戦し、「挑戦できた」とがんばる自分を自覚するだろう。「つながること」は、周りの人を知ることから始まり、協働し、相互に影響し合う関係性を生み出すだろう。また、学びをつなげることで、主体的に学ぶ姿勢につながると考える。「学び続ける」ことは、周りの人との関わりの中で自己を成長させることや、社会自立につながる力を身に付けることにつながるだろう。

このような人としての成長の場として、本校が役割を果たしていくために、教職員一人ひとりが自己の役割を正しく理解し、実直に遂行する教職員集団を形成していく。

子どもたちも、先生も、「楽しい学校」の実現に向けて進んでいくことで、個人としても、集団としても成長できる学校経営をめざしていく。

忍ヶ丘小学校 令和5年度学校教育目標

「みんなで つくる 楽しい忍小」 ◇ 挑戦しよう! ◇ つながろう!
◇ 学び続けよう!

2 めざす学校像、子ども像、教師像（中期目標）

★めざす学校像	○子どもたちも おとなも よりよい自分 よりよいつながり を育む学校
★めざす子ども像	○よりよい自分・学び・つながりをめざし、チャレンジする子 ○自分や友だちを大切にし、つながる子 ○主体的に、楽しく学び続ける子
★めざす教師像	○「楽しい学校」の創り手として、役割を自覚し、主体的に実施する教師 ○ことばを大切にし、子どもたちの育ちを支える教師○強みを生かし、弱みを支え合う 成長し続ける教職員集団

3 学校の現状（よさと課題）

（１）子どもたちの実態

本校の子どもたちは、学ぶことに真面目に取り組み、目の前の課題には真摯に向き合い、答えを見いだそうとする。決められていない条件下では、とても不安が高く、なかなか主体的に挑戦したりすることはできない。安心して挑戦できる場があれば、力を発揮しやりきろうとするが、失敗や間違えることを避けようとするために、一歩踏み出すことを躊躇する。子どもたちの持てる力を発揮する場を用意し、少しずつできる自分、できる自分たちに自信をもつことが大切であると考えている。

また、様々な場面で人に対して優しい気もちのある子どもたちの姿がある。しかし、個の主張が大切にされる社会の状況と同じく、子どもたちも自ら相手を理解し、共に進んでいくための力を身に付けていく必要がある。これによって、不登校やいじめ事案が生起することを減らし、また子どもたちとともに解決していくことを大切にしたい。

（２）子どもたちを取り巻く環境

①教育環境

本校は四條畷市の東側、大阪平野北部を一望できる高台に位置し、飯盛山から連なる生駒山系の山並みを背に、自然豊かなところに立つ。昭和時代の経済成長期に住宅地が拓かれ始め、1973年（昭和48年）に、児童数増加に伴い、四條畷市立四條畷小学校から分かれ、開校した。校区は、東西に広がり、南に四條畷小学校区、西に岡部小学校区、北に寝屋川市と隣接している。校区内は、閑静な住宅地とJR忍ヶ丘駅を中心とした商業中心の地域があり、住みよい環境にある。地域の教育に対する関心は比較的高く、学校教育活動には注目が集まる。

子どもたちの多くが進学する四條畷中学校とは敷地が隣接し、小中連携棟を介してつながっている。昨年度は、四條畷中学校の教員が、行き来することが増え、段差のない中学校進学を意識した連携が実現しつつある。

②地域

校区は岡山自治会という一つの自治会下にある。西端にある忍陵神社は、かつて大坂夏の陣で徳川方本陣が構えられたり、古墳時代の前方後円墳が発掘されたり、と歴史ある岡山地区の象徴として知られている。永く岡山地区に居住されている方と、新しく住まいを構える方とが混在し、歴史を守りながら新しいつながりを築こうとする取り組みが、地域の各団体によって企画運営され、街づくりを行っている。ここ数年はコロナの影響で、その動きも止まっていたが、久しぶりに地区運動会が開催されるなど、今年度からは動き出すようである。東側には大阪電気通信大学四條畷校舎があり、毎朝多くの学生が子どもたちの通学路を歩く姿がある。在籍する子どもたちは、年々岡山東地域から通う人数が増えてきている。

③組織（教職員、PTA、保護者）

本校教職員は、総勢46名。昨年度の「楽しい学校」取り組みを通して、組織的に動くことや協働して取り組むことを経験することができた。中でも支援教育コーディネーターを中心とした校内委員会やケース会議は、組織運営の大きな柱を担った。保護者は学校教育活動に参画しにくい状況であったが、昨年度少しずつ参観機会を増やし、学校へ入ってきていただく機会をもつことができた。しかし、学級懇談会がもてず個人懇談会でのつながりにとどまっていたため、学級・学年の集団として子どもたちを捉えたり、担任の思いや考えを知ったりする機会がなかった。今年度は、参観・学級懇談会を開き、子どもたちの学校での様子を知ってもらい、学校教育活動に参画してもらう素地づくりが必要だと考える。学校運営協議会も含め、地域の方々の学校との関わり方をより充実させていくことを促していきたい。

4 今年度の達成目標、具体的な方策			
目標設定区分1 『学校経営』			
A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
「挑戦」「つながり」「学びの継続」の3つの柱に基づいた「説明力」の育成を通して、「楽しい学校」の実現をめざす。		○ 学校教育自己診断アンケート ○ TMに係る児童アンケート ○ 楽しい学校 Project アンケート	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
「説明力」の育成 ○校内研究(TM)の取り組みを通して、説明することは、できるようになったと児童が実感する。 ○授業中、自分の意見や考えを伝える場面がある、と児童が認識する。 ○授業中話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広めたりしている、と児童が認識できるようにする。 ○各教科等の目標や内容の相互関係を意識して日々の授業を行っている。 (教)	肯定的評価 80%(児) 75%(児) 80%(教) 75%(児) 80%(教) 90%(教)	83.8% 74.0% 81.10% 83.0% 96.0% 82.3%	これまでの、「書く力の育成」を柱に取り組んできた中で、子どもたちが一番「書くことができるようになった」と実感の持てた一年間であった。「説明力」という力に焦点化したことが、子どもたちにも「何ができるようになるか」が明確であったことが大きく影響している。 「書く力の育成」は、表現することの一部であり、話すことや聞くことと関係性が大いにあり、「書く」ことがたの表現につながっているということが左の結果からうかがうことができた。 カリキュラムマネジメントの視点は、教職員の中に根付いているが、日常的な授業に常に紐づいているかどうか、という点において課題が残っていると言える。しかしながら、常に実現が可能であるかどうかという点を含め、今後も学びを続けていきたい。
「挑戦・つながり・学びの継続」を実感する場の設定 ○「挑戦した」「つながりを考えた」と振り返る児童を増やす。 ○既習事項や先の学年で学ぶ内容との関連(系統性)を意識して指導するようにする。 ○学校に行くのが楽しい。 ○運動会や遠足などの学校行事やペア活動などでは、自分の役割や活動の目標を設定して楽しく活動	肯定的評価 75%(児) 90%(教) 85%(児) 90%以上(児)	84.4% 93.1% 81.7% 91.2%	「楽しい学校」をめざして、柱とする具体的なことがらについて、意識して取組みを進めることができた、といえる。 振り返りの仕方、書く内容については今後も検討が必要であるが、「まんぞくハシゴ」を併用することによって、自分の頑張りを客観的に捉えることができるようにしてきた。子どもたちには、取り組みやすい振り返りだったようだ。 結果的に学校生活が「楽しかった」と思う子どもたちも目標値に近い数値が見られる。またその「楽しい」を自らが関与してつくりだしていることへの意識が見られたと考えられる。 子どもたち自身が役割を自覚し、学校など集団に

できた。 ○自分をわかってくれる友 だちがいる。	90%以上(児)	89.4%	寄与する実感がもてる機会が少しでもつくれたので はないかと考える。
--------------------------------	----------	-------	--------------------------------------

目標設定区分2 『学校組織の運営』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
学校教育目標を意識した教育活動を展開し、目標達成に向けて、一人ひとりの役割を自覚し、互いに学び合い支え合う教職員集団の形成。	○学校教育自己診断アンケート ○自己申告票

B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
学校教育目標実現に向けた教育活動の展開 ○ブロック長会議を月1回開く。 ○学校の教育目標を意識して授業や行事に取組んでいる。 ○教職員の間で、授業方法等について検討する機会がある。 ○大きな取り組み前後に行う作戦会議は有効だった。	肯定的評価 85%(教) 80%(教) 90%(教)	70.6% 82.3% 76.5%	ブロック長会議の定例化は、多忙な日常の中ではなかなか難しく、必要な時（どちらかと言えば管理職が必要としているとき）の開催となってしまった。教職員の数が不足している中で、それを補強しながら校内を走り回っている状況の中では、仕方なかったと言わざるを得ない。 TMの全学級公開授業において、学習指導部が中止となり、全ての教員が授業づくりに協働して取り組む機会があったことは、授業力向上につながったとともに、教職員のつながりの醸成が進んだ。
教職員一人ひとりの役割の遂行 ○教職員間で子どものことや授業のことなどについて話がしやすい。 ○自分自身の役割を果たすことができた。	100%(教) 75%(教)	94.2% 94.1%	教職員のつながりを強めるために、教職員が学校組織に寄与する一人ひとりの役割を明確にしたことは、次期ミドル世代の働きに加え全体の相互の関与が増えたことにつながった。

目標設定区分3 『人の管理・育成』

A 今年度の成果目標	達成基準（各種調査、アンケート等）
ミドルリーダーの活躍を促し、次期ミドルリーダーの育成を図る。また、教員一人ひとりの資質向上を互いの学び合いにより実現し	○ミドルリーダーへのインタビュー ○学校教育自己診断アンケート

ていく。この 2 点に取り組み、支え合う教職員 集団の醸成をめざす。			
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価
ミドルリーダーの活躍と時期 ミドルリーダーの育成 ○ミドルリーダーとして、教職員集団の関係構築に、有効に働きかけができた。 ○次期ミドルリーダーの育成を意識した働きかけができた。	肯定的評価 90%(教) 90%(教) *インタビューによる振り返りにより評価する。		年度初めのブロック長会議で、これまで各指導部の部長だったミドルリーダーから、次期ミドルリーダーに部長の役を委ね、後方支援することで人材育成を図りたいという意向を聞いた。部長をそのままにした指導部も TM という事業の加配を先頭に取り組みを進めていた。 初めは、双方ともに不安なことを言っていたが、進んでいくうちに、「思ったよりがんばっている」「前に出ていこうとする姿勢がでてきた」など、少しの成長を見て喜びを感じていた。 結果部長の役割を支援してもらいながらではあるが、最後まで務めた部長たちは、達成感があり一歩成長することができた。
教員一人ひとりの資質向上を互いの学び合いにより実現する ○初任者を始めとする経験の浅い教員を学校全体で育成している。 ○学び合う機会は、自身の資質向上に役立った。 ○ことばを大切にすることを、意識して職務に当たっている。	肯定的評価 75%(教) 80%(教)	64.7% 94.2%	今年度配置の初任者については、途中で退職に至ってしまい、教職員それぞれが残念な気持ちと自身の関わりについて振り返ることとなった。 しかし、そんな中で学級経営や授業展開に、学年や学年ブロックでの取り組みを進めることで、互いに学びあい、支え支えられる関係性が築かれていった。 子どもの話、授業の話をしやすい職員室であったと振り返ることは、校長としてもとてもうれしい結果であった。

目標設定区分 4 『地域連携と渉外』			
A 今年度の成果目標		達成基準（各種調査、アンケート等）	
保護者の学校教育活動の参画を促すとともに、学校運営協議会の活動を定着かつ発展させ、地域連携をすすめる。		活動実績 学校教育自己診断アンケート	
B 目標実現に向けた取組み			
項目	達成基準	結果	評価

保護者の学校参画 ○学校通信や学年通信などで児童の様子をよく伝えている。 ○参観や懇談会を通じて子どもの様子がよくわかる。	肯定的評価		学校通信や学年通信, 学級通信などさまざまな形で学校の様子を保護者にお知らせできるように発行してきた。中には学校だよりの記事について感想を伝えてくださる保護者もいた。
	85%(保)	90.8%	左のアンケートからも伝える手段としてまた場としては有効と捉えられていると言え、今後も内容等に工夫点を見いだしていきたい。
学校運営協議会の動き ○協議会の計画を確実に進める。 ○協議会としての活動を広げる。			当初の計画通り, 取組みを進めることができた。取組みを進める中で, 委員の方々が楽しく活動されていた姿がよく見られたことはとてもよかった。 大そうじの取組みは 2 回目の開催ができ, 地域の方の参加も人数が増えた。継続していく中で広がっていく兆しが見える。 協議会のマスコットを決めたり, その名前を付けたりして, 少しずつ子どもたちにも周知され始めている。

5 総合評価と次年度に向けて

昨年度までのカリキュラムマネジメントの取組みで学んだことを学校組織の素地として, 取組みを進めてきたことが成果として大きかった。焦点化して取り組んだことは継続が難しいことが多いが, 基本的な考えかたとして, 教職員に根付いた取組みが見えた。いかにこれを継続していくかが, 忍小としての課題である。

特に TM の取組みは, 授業力向上という面でも, 教職員の協働性を高めるという面でも, 人材育成の面でも効果的であった。

校長としては, ミドルリーダーの活躍をすすめながら, 学校組織を活性化していくことがねらいであったが, ミドルリーダーをミドルリーダーとして, 支えたり頼ったりすることで他の教職員への影響力を発揮する関係性が築かれたことや, できるだけ全ての教職員が学校運営に寄与した実感を持つよう役割を明確にしたりしたことで, 教職員の意識は学校運営に向かっていると考える。

次年度は, TM の取組みが 2 年目を迎え, 1 年目よりバージョンアップした取組みをすすめ, 教職員自身も資質向上した, 学校として取り組んでよかったと実感を持てるようなものにしたい。次期ミドルリーダーを育成する動きは継続し, その分ミドルリーダーがどのようにリーダーシップを発揮するのかを考えていく必要がある。そうして, 忍小を教職員がみんなで動かしている, 働き甲斐のある学校にしていきたい。そうすることで, 教職員が関わり育てていく子どもたちも, 学校生活や自分の成長を楽しみにできるのではないかと考える。